

研究と同一であると言った弊から、徐々に抜け出して来ている事は喜ばしい事である。各大学に共通して言える事は、年々近代文学専攻の学生が多数を占めている事である。けれど、その内実は、非常に熱心か、さもなくば、怠け者に峻別されるようである。本学は一様に皆熱心である。ただし、熱心さの方向がいささか異っている面も見られなくない。不断から論文のスタイルについては、喧しく言ってきたので、それは出来ているが、やはり、原典を精読する仕方と、その中から問題点を見出して、論理化する力が不足している。原典を精読することを強調すると、論文はその要約になってしまったり、逆に問題意識が旺盛故に、論理が上滑りしてしまって、独断に落込んでしまうという矛盾も見られる。卒直に言えば、三年次のレポートの方が面白いのに、四年次になると、つまらなくなるのは何故であろうか。どうも四年次になると、他の研究論文が気になると思えて、それに倚懸って、原典を離れてしまっているのではなからうか。どんな形のものでも、己れの肺腑から滲み出たものであってほしい。近代文学関係の文献の調査の仕方がまだ十分でない。喫茶店に入るように気易く図書館に入りたいものである。

大分悪口を書いたが、私のゼミの論文の傾向について述べてみたい。明治・大正・昭和にわたっており、中々バラエティに富んでいて一概に言えないが、作家論より作品論が多い。傾向としては悪くないが、全体を見通す力が不足しているとも言えよう。島崎藤村、夏目漱石、森鷗外、有島武郎、芥川竜之介等が多い。樋口一葉、林芙美子も見られる。作品の成立過程を検討したものとして、『時任謙作』から『暗夜行路』へ、『或る女のグリンプス』から『或る女』へといった論文も見られる。一つのテーマを決めて、広く展望

しようとした論文として、〈樋口一葉日記に見られる意識の流れ〉、〈独歩文学に見られる自然観〉、〈自然主義文学に於ける家の考察〉、がある。また児童文学としては、藤村との関連で扱えた宮口しづえ、宮沢賢治、新美南吉等も見られる。私のゼミは八〇枚で書くように言っているので、作品であっても、前後二・三の作品を考究しており、今一步進むと作家論の糸口になって大変良いと思っっているのだが。新しい分野としては、鷗外の創作集『走馬燈』『分身』の世界を検討した論文もあり、夏目漱石の『漾虚集』『夢十夜』を〈見るもの〉と〈見られるもの〉という発想で扱えた論文もある。年々テーマも広がりつつあり、喜ばしい事であるが、更に自己と切り結ぶような論文でありたい。小さくて大きな世界を構築したいものである。諸君等の努力に期待したい。

### 卒論を読んで —— 近代

菊地 弘

このところ暮から新年にかけて卒業論文を読むのが慣わしとなつてしまった。卒論を読むのだと心に決めてしまえば、落着いてしまうもので、慌しく動きまわっている世間の有様がむしろ滑稽に思えてくる。世間を横目で見ながら、私は一枚一枚の卒論原稿を余裕をもって読むことが出来るのである。

常日頃、卒論の対象とする作家はできるだけ大きな作家を選ぶように、またできれば個人全集の刊行されている作家がいいと指導していることと、この二、三年私が演習で行っている授業が一九一〇

年代の文学に絞られている関係もあろうか、論文に扱われる作家は、島崎藤村、夏目漱石、志賀直哉、有島武郎、谷崎潤一郎、芥川竜之介が多く、そこに太宰治など戦後の文学や、児童文学に至るまでさまざまなものが加っている。日本の近代作家の中で選ばれた一作家のどういうところに魂が魅せられたのか、冷静に見て批評が作品を通じてどう自分自身を表現しているのか、私はそんなことを思いながら読んでいる。借りものでなく自身の感覚で掴んだものがあるればよしと思う。

扱う内容も、主人公の自我についてとか、作家の人間存在についての認識とか、あるいは人間存在の不安についての哲学的考察とか、なかなか難しい、興味津々たるものがあるが、大方は愛とか死とかに集約されそうである。生あるものの根源的な問題であるから、いつの世にあっても関心事となるのは当然のことであろう。常規を逸していないのである。その評価は多種多様であるが、これまた大方は通念を超えてはいない。「それから」の代助が人妻と結婚したこと、友人を裏切った「こころ」の先生の罪の意識などについて厳しく道徳的規範ののっとって批判するなどは例年みる一例だが、学生気質の変質をきく今日その健全な道徳意識に苦笑するものである。そして私など慌てて日頃の指導のいたらなかったことを反省し、こんどは頻りと作品は一個の風船だと思つて、通念にとらわれずに自由に自身の感覚でうけとめなさいと説いたりするものである。かつて真宗を奉じている学生が「門」の宗助が参禅に行ったところを宗旨の違う立場から論じたのを読んで莞爾としたことがある。小説家は創作することが大事なのであるから、作品の造型性を潑刺とした感覚と観念で、それがときに通念をはずれたものになっ

ても、掴めることである。こういう操作なくしては作家論も成り立たないと考える。それとともに作品や文献に多くあたることも肝要である。それは自身の感覚を確実なものとし、磨き上げることにするのであるから。

大方の学生にとって論文を書くことは最初でかつ最後であろう。四年間の学生生活のしめくくりとして、その間に得た知識と方法で書くのである。読む側でそれがいろいろの意味で刺戟剤となることを期待していることを知っておいてもらいたい。

## 卒論を読んで

— 国語学

橋本 研一

国語学のゼミの学生は極めて少なく、論文を提出した学生は、四回生までで八名にすぎないから、特にとりたてて論文の傾向を述べるほどのものはない。国語学の概説が一年生のとき行なわれるが、一年の時であるせいも、またあまりにも足早に通過ぎなければならぬせいも、各論における問題を自分で発見し、研究の対象とすることはむずかしいらしい。従つて二年以降の国語学Ⅱや国語講読の授業において示唆したテーマに関連したものが多く、それ以外は、語彙論一篇（平家物語における心情表現の語について）と、文体論一篇（口語文の成立について）だけである。教室で示唆した問題をテーマとするものは、私自身の研究課題や関心のあるテーマが多いから、私自身の大よその結論や予想に触れることも少なくない。自分で苦しんで思考して得たものではないと、最初の出発点であるは